

腎排泄型 DPP-4 阻害薬の投与量適正化にむけた薬局薬剤師の介入

入澤 佑紀¹⁾、恩田 幸憲²⁾、石黒 貴子²⁾、前田 守³⁾、長谷川 佳孝³⁾、
月岡 良太³⁾、森澤 あずさ³⁾、大石 美也³⁾

- 1) 株式会社インファーマシーズ イン薬局 板橋店
- 2) 株式会社インファーマシーズ
- 3) 株式会社インホールディングス

【目的】DPP-4 阻害薬は、その代謝経路から腎排泄型や肝代謝型などに分別されるため、腎・肝機能低下患者の投与量には注意が必要である。本研究では、腎排泄型のアログリプチンやシタグリプチンに着目し、腎機能にあわせた処方量適正化にむけ薬局薬剤師が取り組むべき課題を考察した。

【方法】2018 年 1～12 月に当社が関東地域 1 都 6 県で運営する保険薬局 136 店舗が応需した処方箋から、DPP-4 阻害薬が記載された処方箋の枚数を集計した。また 2018 年 8～10 月にイン薬局板橋店で応需した処方箋から、アログリプチンとシタグリプチンの処方患者を抽出した。抽出患者の年齢、性別と厚生労働省作成の「平成 29 年国民健康・栄養調査データ」から平均体重と血清クレアチニン値を調査し、Cockcroft&Gault 式でクレアチンクリアランス (Ccr) 概算値を算出し、Ccr 概算値から投与量上限値を算出して各薬剤の実投与量と比較した。なお、本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0013)。

【結果】2018 年の年間処方箋応需枚数 3,379,853 枚のうち、4.7%に DPP-4 阻害薬が、0.42%にアログリプチンが、1.7%にシタグリプチンの記載があった。調査期間中にイン薬局板橋店でアログリプチンが処方された患者は 20 名、シタグリプチンは 216 名であり、実投与量が投与量上限値を超過している可能性のある患者はそれぞれ 3 名(15.8%)、6 名(2.8%)であった。アログリプチン処方患者 1 名は Ccr 実測値も確認でき、投与量超過が疑われたため疑義照会して減量となった。

【考察】厚労省データからの推定腎機能での評価だが、DPP-4 阻害薬の実投与量が投与量上限値を超過している可能性のある患者を確認でき、実際に薬局薬剤師の介入で減量に至る事例もあった。腎機能低下の疑いのある患者を抽出し、投与量適正化に向け積極的に介入することは、安全な薬物治療の担保に向けて薬局薬剤師が取り組むべき役割の一つと考える。

(第 29 回医療薬学会年会(2019 年 11 月, 福岡)にて発表, 一部要約)